

化石館だより

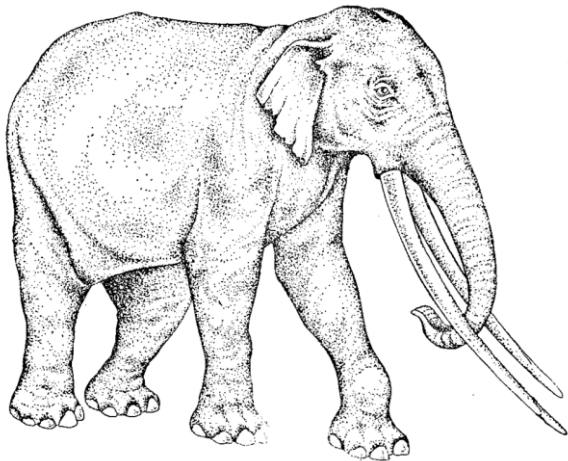


コラム

金生山のナウマンゾウ化石

ナウマンゾウという古代のゾウがいます。ナウマンゾウは国内での発見例が多く、日本で発見される古代ゾウの中では最もよく知られている種類だと思われます。

ナウマンゾウという名前のもととなった「ナウマン」は、明治時代の初期、東京大学地質学科の初代教授として招聘されたドイツ人の地質学者です。ちょうどナウマンが来日していた頃、横須賀の軍港建設工事が行われており、その工事現場からゾウの化石が発見されました。これを鑑定した彼は、この化石をインドのナマディクスゾウと同じであるとして報告しました。その後、1924年に静岡県浜名湖岸で類似のゾウ化石が発見されたとき、槇山次郎は横須賀で見つかったゾウとは異なると考え、*naumanni* というナウマンの名に因んだ亜種名を付けました。ナウマンゾウの誕生です。その後、このゾウはエレファス属とするのかパレオロクソドン属とするのかで論争がありましたが、現在ではパレオロクソドン属のゾウとされ *Palaeoloxodon naumanni* という学名が与えられています。



パレオロクソドン属のゾウ：古生物百科事典より

ナウマンゾウは、約30万年前から1.5万年前まで生息した生き物です。僅か数万年前まで生息していたゾウの化石が、遙か昔の古生代ペルム紀(約2億6千万年前)に堆積した赤坂石灰岩から見ついているという「何かの間違いでは？」と思われるかもしれませんが、これは確かな事実なのです。

金生山化石館設立の基となった、故熊野敏夫先生もこのことを不思議に思われ、横浜国立大学の鹿間時夫博士に尋ねておられます。鹿間先生は、「確かに発見されている。その標本は私の手元にある。」と言われ、更に「そのゾウ化石はナウマンゾウの大腿骨である。」と教えられたそうです。なんとも不思議なことです。

どうして古生代の石灰岩から新生代のゾウ化石が発見されたのでしょうか。これには次のような理由が考えられます。

金生山に限りませんが、石灰岩地には浸食に伴ういくつもの割れ目があり、そこには泥や砂、石などが堆積しています。このような割れ目のことを裂罅(れっか)といい、そこに堆積した泥や砂などを裂罅

堆積物といいます。裂罅堆積物は主に粘土から成っていますが、これらの堆積物は基盤の石灰岩が陸上に現れてから堆積したものであり、石灰岩が堆積した時代よりずっと新しい時代のものなのです。



とぐろを巻いたへびの化石
(金生山 その文化と自然より)

赤坂石灰岩が陸上に現れ浸食が始まったのは新生代になってからです。その頃には、陸化した赤坂付近を多くのナウマンゾウが歩き回っていたと思われます。化石になったナウマンゾウは、金生山の近くで死に、その体の一部が砂や泥とともに裂罅に流れ込みました。そして、長い時間の経過とともに化石化していったのです。

金生山の裂罅堆積物からは、ナウマンゾウの他にもヒバカリ (*Matrix sp.*) とされるへびの化石や、ニホンムカシジカ (*Cervus praenipponicus*) の角、またネズミやコウモリなど小動物の骨などが発見されています。中でもヒバカリという名のへび化石は、ほぼ全身がとぐろを巻いたような形で残っており大変珍しいものです。

(文責：高木洋一)

お知らせ



前期 企画展

5月3日(木)より、「金生山の大理石と石細工」をテーマに、前期の企画展を開催します。

金生山からは、紅孔雀、更紗、五色、紅縞などと名付けられた、色彩や模様の豊かな大理石が産出します。この大理石を用いた石細工は江戸時代から行われていました。他では見られない金生山の色彩豊かな大理石と

これを用いた石細工の作品を是非ご覧ください。

期 間： 5月3日(木) ～ 9月3日(月)

場 所： 金生山化石館 2階展示室

入館料： 100円 高校生以下無料

休館日： 火曜日(祝日の翌日：その日が土・日の場合は月曜日)



問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)

Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp